

院長挨拶 6月

薫風薫る五月も、コロナ禍と早めの梅雨入りであつという間に過ぎて行きました。熊本労災病院のHPを訪れていただき感謝申し上げます。

熊本県でも、4月末から感染者が急増し、当院でも、あつという間に一病棟全体をCOVID-19対応にすることになりました。熊本市内での医療状況は完全に逼迫し、「重症者は市内の3次医療機関で治療し中等症以下を他の病院で診ましよう」、というこれまでの県全体での機能分担が立ち行かなくなりました。熊本県の医療調整本部の斡旋で当院にも八代医療圏外からの患者さんたちが多く搬入されてきています。当院では初めて人工呼吸器を付ける、いわゆる「重症患者」も受け入れることになりました。担当する呼吸器内科医師の負担とともに、質量ともに看護負荷も増加し、これまでの3人夜勤体制から4人夜勤に増強しました。これには当該病棟の看護師さんだけでは足りないため、ICUから応援を出しています。そのために、ICUの病床を減らす対応をしており、ICUに入るべき他疾患の重症者や術直後患者さんなどを一般病棟で看るような体制も強いられました。救急医療体制は通常通りを維持しつつ、病院を挙げて事態に対応しているところです。患者減少傾向が見えますが、これが維持され重症者が減らないとこの逼迫状況は変わりません。県内の対応病床も、県の実情もあり、大学病院も含め多くの病院で増加し、医療逼迫は一端収束に向かいそうです。ただ、おそらく、今回落ち着いてももう一山来ることは容易に想定されますので、全県一丸となってより重い負荷に対応できる体制が今の時期に作られつつあります。

感染を予防する切り札のワクチンですが、当院でも、5月31日から、かかりつけの高齢者を対象に接種が始まっています。いろいろな疾患を持って当院にかかっておられる方々ですが、カルテの記録がきちんとありますので、体調全般や、前後の化学療法や手術などの状況も勘案し、接種しても大丈夫、と確認しております。基礎疾患を持つ高齢者であり、早めの接種が必要と思われるかたがほとんどです。ワクチンの保管や分注には薬剤部があたり、多くの看護師さんの協力、研修医含め全診療科の医師の当番制での予診など、これも病院あげての対応で、副反応にも備えつつ、安全に接種をすすめたいと思います。6月には、65才未満のかたがたへの接種券送付も始まるそうです。今後は、かかりつけの患者さんというよりは、勤労者を含めた活動豊かなかたがたが対象になりますので、勤労者医療を旨とする労災病院としても、地域住民の利便性と効率性にも配慮した接種体制を構築し、社会防衛としての集団免疫の獲得にささやかながら寄与したいと思っております。今後の当院の接種のやり方などはHPで周知する予定ですので、ときどきみていただければと存じます。

それにしても、です。この、1年半にもわたるパンデミックがもしなかったら、と考えてしまいます。国内でもすでに約13000人余の方が亡くなられました。数の多少ではなく、そのお一人お一人ご自身、そして周囲の方の無念を思うと、この感染症の怖さと、どうしてこの方が、という思いを禁じ得ません。入院してきた時はお話しもでき、特に基礎疾患もな

いかたが、最大限の治療の効無く亡くなられる場面にも遭遇しています。単なる流行病、どころか、だれでも罹りうる、致命的となる他のいろいろな病気の様に、れっきとした病気であるという現実を、もっと多くの方が知るべきだと思います。管理的立場にいと、どうしても数だけで評価しがちですが、個々のケースで真相を知り、思いをはせ、反省すべきは反省して対策をきめ細やかに考えたいものです。人命はもちろんですが、費やされてきた思考、膨大な報道、そして、直接に消費され、あるいは生産できなかった資源、など、マイナスの要素ばかりが頭にうかびます。もし、これが無ければ、公私のエネルギーが、時間が、資産がどんなふうに使われたことでしょうか。一昨年末に確立しかけていた、九州大学の先生がたと一緒になってのベトナムやミャンマーの重度肝障害児童への肝移植医療支援は頓挫し、おそらく対象となり得た少なからぬお子さんが亡くなっていると思います。感染蔓延と引き換えに、短時間で生み出された新たな形態のワクチン、集団感染に対する社会や医療の体制整備、IT を交えて普遍化される教育体制、リモートによる会議やイベントの合理化、など、やむを得ず生み出されてきて、今後の社会変革にむけたメリットもない訳でもありません。そういうものをあえて探さねばやってられません、何十年も遡って「あのころから備えておけば」、と思えることも少なくありません。医療では、結核の減少による感染症医療体制の縮小や保健所業務の縮減、ワクチンなどの最終的実利につながる基礎研究の支援の低下など、が思い浮かびます。長期に及ぶ異常な社会情勢で、若い人たちの進路の決断にも少なからぬ影響があると思います。遠方への進学など、感染と経済の両面から控える傾向になってもおかしくありません。今後何十年の日本の将来が左右されることを怖れます。文化や自然を愛でたいという好奇心もしぼみます。私自身、人生の先が見えてきた今、一刻も早く普通に移動できる世界となり、好きなところで好きなことをする、安らかな日々が訪れることを願います。

とはいえ、その前に、熊本労災病院の、ソフトハード面でのいっそうの改善は急務です。感染騒ぎに紛れてはならないと思っています。地域の皆様に頼られ、職員が積極的に運営に関与し、大学からも医師を派遣したいと思うような病院であり続けることができるよう、自分なりの努力を続けたいと思います。これからも厳しいご指導とご支援をよろしくお願いいたします。